

「あらためてふるさとみやぎの復興を考える」シンポジウム

日時 2013年3月16日(土) 13:00~16:30

会場 仙台国際センター大ホール

主催 東日本大震災復旧・復興支援みやぎ県民センター

司会 仙台国際センターにお集まりの皆さん、こんにちは。あらためて今、ふるさとみやぎの復興を考えるシンポジウムにご参加いただき、ありがとうございます。私は本日のシンポジウムの司会を務めさせていただきます宮城県母親大会連絡会の小澤です。よろしくお願いたします。あの東日本大震災からはや2年が経ちました。県内死者9,534人の尊い命が失われ、今なお1,300人の方々が行方不明のままです。これら犠牲者の方々に黙祷を捧げたいと思います。皆様ご起立ください。

一黙祷一

司会 お直りください。ご着席ください。それでは開会にあたり、主催者の東日本大震災復旧・復興支援みやぎ県民センター事務局長菊地修よりごあいさつ申し上げます。

菊地事務局長 皆さん、こんにちは。今日は大ホールということでどれだけの方が来ていただけたのかと、はらはらどきどきしておりましたが、こんなにたくさんの方に来ていただいて、大変感激しております。あの震災から2年が経ちました。今、被災地の現状はどうなっているかと言いますと、この間震災2周年ということで、各新聞が特集を組みましたね。そこで出てきているのはやはり「収入が減った」それから「将来に展望が持てない。これからどうなるんだ」と。それから何と言っても健康に対する不安です。これが各紙で共通していたと思います。

その一方でどんなことが行われているかと言いますと、復興とは関係ないところにお金がかかっている、そういう現状もあり、あるいは箱物の行政、そういうものにお金が使われていると。そういう現状があると思います。

私たち県民センターは被災者、被災地が主人公の復興を目指して、2年前に設立されました。以来、いろんなことに取り組んでまいりました。この2周年を機会に、本当に被災地・被災者の立場に立った復興、これを考えてみたいと思います。決して上から目線、箱物だけの復興に終わらせてはいけなと思います。地域の歴史、伝統、文化、そういうものに根ざした人の復興でなければいけないと思います。今日はそれを考える機会にしたいと思います。

今日は報告者の皆さん、本当にありがとうございます。いい話を聞けるとと思いますので、

これから3周年に向かってともに歩んでいきたいと思えます。よろしくお願いします。

ーオープニング演奏ー

ーシンポジウムー

司会 それではシンポジウムを始めたいと思えます。パネラーの皆さん、お入りください。シンポジウムのコーディネーターは東日本大震災復旧・復興支援みやぎ県民センター代表世話人の網島不二雄でございます。それでは網島さん、よろしくお願いいたします。

網島代表世話人 (以下、網島と略) 皆さん、こんにちは。どうも多数お運びいただきまして、ありがとうございました。今日は冒頭申し訳ありませんけれども、ちょっとお詫びをしなければいけません。1つはお名前見ていただくとわかりますけれども。一番右端、今村正誼さんお座りいただいておりますが、チラシをご覧になった方は「あれ、鈴木さんじゃないのか？」って思う方がおられると思えますが、我々のミスでございまして、チラシを発行してからもう一度刷り直しをして、今村さんという形にいたしましたので、ご本人でするので、よろしくお願いします。今村さんや皆さんに失礼をいたしました。どうかお許しください。

それからもう1つお詫びしなきゃいけません。石巻日日新聞の武内さんがいないのではないかとあります。今、石巻日日新聞は報道で有名な壁新聞で賞をもらったり、いろいろと頑張っていらっしゃいます。その頑張りを地域に還元をしたいということで、石巻にNEWS, e e 館という震災歴史資料館をかつての中央通り、いまは人通りがなくなったところにつくりまして、そこで人通りをとにかく確保したいということで奮闘されております。

武内さんは、その館長さんになられまして、今日も近県から120名くらいの方がお見えになるということで、館長がいなければ何ともならないということで、急拠ご欠席になってしまいました。大変申し訳ありませんけれども、よろしくお願いいたします。“日日”がいなくて、シンポジウムに“ひび”が入るのではないかと、こういう心配もあるかもしれないけれども、このひびは我々3名プラス1で何とか補ってまいりますので、どうかよろしくお願いいたします。

このシンポジウムはある面では震災2年を迎え、皆さんそれぞれの思いで活動されてきたと思えます。我々も先ほど事務局長のあいさつがありましたとおり、被災者の立場に立って、可能な限りの活動をしてきましたけれども。やはり2年を経て、もう一度振り返って、いわゆる「復興」とは何なんだろうか？ということ。復興の源にはやっぱり人の復興、暮らしの復興、生業の復興、そういうものがあるのではないだろうか。そこを改めてもう一度考えて、そしてそれぞれの思いを込めて、次のステップに入っていきたい。そ

のための1つの区切り、区切りではありませんけども、到達点の1つとして、今日のシンポジウムを迎えたいと、そのように思っております。

ですから今日はある面では、お互い学び合うシンポジウムということで、意見をたたき交わすというよりも、むしろ学び合う、静かに学び合う、そんな仕組みのシンポジウムにしたいと考えておりますので、どうかよろしく願いをいたします。それでは初めに結城登美雄さんからお願いします。「ムラ、浜、コミュニティのくらしと文化を学ぶ」です。農業のこと、いろいろなことたくさんあるんですけども、結城さんは浜の暮らしに絞って、その根源にあるものをお伝えしたい。そういう意思がございまして、浜の暮らしと文化に学ぶということで、30分ほどお話をさせていただきます。

続きまして渡邊さんからは地域の文化と新たな縁ということで、話をさせていただきます。そして石巻日日新聞につきましては、メッセージをいただきましたので、これを読み上げるという形をさせていただきます。そして最後に、今村さんのほうから内陸部のくらしと地域文化からみやぎの復興を考えるという形で、ご提言をいただきます。それでは結城さん、よろしく願いいたします。

「ムラ、浜、コミュニティのくらしと文化を学ぶ」

民俗研究家 結城登美雄氏

結城です。よろしくお願いします。スライドを用意してきました。短い時間ですが、私はこの20年近く、東北の農山村漁村を訪ねまして、数にすりや600ぐらいの集落なんですけど、そこで暮らしているらっしゃるおじいちゃん、おばあちゃんを中心にたくさん教えていただきました。

雪が降ると行くところがなくなると、よく浜に出かけました。浜に行くと船は出ていないけども、網をつくろったり、いろんな段取りを取っているおじいちゃんの姿なんかを見ます。そこに迷惑を顧みず、いろいろ話を根掘り葉掘り聞かせていただきながら、いわば耳学問ではありますが、聞けば聞くほど、僕が暮らしている仙台とかあるいは生まれ育った山形の山奥とは違うとは言いませんけど、とっても大切な生き方、暮らし方、精神文化みたいなものを感じてまいりました。私が学ばせていただいたものを皆様にお伝えすることで、ともに学べればなと思ってお話をさせていただきます。

これは宮城県の唐桑半島です。手前に畑があります。向こう側に海があります。半農半漁、教科書では貧乏だから半農半漁だと思ったんですが、そうじゃないんですね。畑仕事に飽きたら、海仕事に行くよ。海草を採ったり、海仕事に飽きたらまた畑仕事だよと。ごちそうが次々にやってくるよ。ここは私のデパート、心が疲れないよ。金がなくても安心して子育てができるよ。そんな言葉を聞くと、段々、海辺の風景が私は変わって見えるようになりました。人が生きる場としての海辺の暮らし、そんなことを時々学ばしてもらった唐桑半島です。

東北の岩手・宮城・福島、この3県をいずれにしても、牡鹿半島あたりまではこういう

リアス式海岸と、いわゆるのぎりのぎざぎざみたいなところがあります。こういうところの繰り返しであります。そういうところに岩場で海草を採ったりする人たちがいます。

その海辺というのはどのくらいの場所なんだろうかという、大体岩手は沿岸線が706キロっていうんです。宮城は828キロ、福島は意外と短くて、まっすぐの線が多いんで、167キロ。そこに岩手は111の漁港があり、宮城は142の漁港があります。5キロか6キロに1つずつ港があるわけです。

706キロ、すぐわからないかもしれませんが、東京ー青森が713キロですから、岩手の沿岸がいかにぎざぎざになっているかが、宮城はもっとあるんです。東京ー広島ぐらいがこのぐらいですから、828キロ、海岸線が非常に長い。そこに人々の暮らしの場があります。日本には大体2,914の漁港があるそうですが、12キロに1つですが、我が宮城は6キロ弱に1つずつ漁港があります。

そういう漁港にはこの辺にあるように、船外機のような、小さな養殖漁場に向かうような船、沿岸沖合いあたりまで行く、こういう小型船、動力船ですね。こういうところに集落があります。こういうものが次々に形を変えて現われる。これが沿岸船です。これは気仙沼あたりです。あるいは唐桑から見た気仙沼の方向。そうするとこちらにも集落があります。こっちはちょっとまちばのようです。この辺にも漁業集落があります。

漁業集落は全国に6,300ほどあるんですが、宮城には212の集落が、4キロごとに集落があるんです。岩手は194、3キロか4キロごとに漁業集落があるということですね。そこに行ってみりや、こういうところの積み上げ、200いくつの集落があるというふうにイメージしていただければ、大きいところの中にはありますけれども、大体は小さな集落と考えるとよろしいかと思えます。

そういうところに働いている人は、岩手は14,000人、これ震災前です。宮城は11,500人くらいでした。漁業というときを男を考えがちですが、男は大体半分です。いわゆる僕らは漁師さんというときに男性を思い浮かべる。しかし女性が1,900人。宮城も1,800人。それ以外に忙しいときに、あるいは養殖だと例えばカキの殻むきとかですね、あるいはワカメの芯抜きとか、いろんな浜仕事が養殖には伴います。そういう人たちのおじいちゃん、おばあちゃん、お母さんたちを中心にした、宮城だと36%がこの漁師さんのところで働く人たち。1人の漁師の向こう側におじいちゃん、おばあちゃんの仕事の間があるんだということ。これ意外とわかられていないので、あえてこんな数字を出してみました。

今はこういうのがなくなっています。たまたま1週間前、報道にはほとんど出ませんでした。実はあとから出ますけれども、これがどのくらい今、仕事をやり始めたか、総務省の調査が出ましたので、あとで紹介します。

どんな仕事かっていうと、僕も1985年ごろから沿岸に関わるようになりましたが、この気仙沼の大漁旗、遠洋まぐろ船、世界の7つの海を勇壮に、しかも半年、1年の長期操業。しかし金にはなるが、段々それが昭和60年代、平成に入るところから、かつては人並みはずれて儲かったのも段々、今は普通のサラリーマンの半分くらいの釣果でしか、経済的には

らなくなったりして、少し寂しくなってきました。

沿岸に行く、これは突き棒漁です。私も乗せていただいたりして、ゲロ吐きながらの体験でありましたけど。いかに厳しいところで仕事をしているかを感じたわけです。いわばこれはカジキを獲って、3日に1つ獲れたらもう言うことないっていう。だけど海はそう簡単に獲らせてくれません。

こういう長期操業の人たちのためにその無事を祈り、大漁を祈るために、浜に残ったお母さんたち、女性たちは家族で1日と15日、今もそれを続けておりますが、お参詣と言いまして、唐桑半島であれば80ほどの神社があります。その神社に10ヶ所、12~13ヶ所を願かける、お参詣という儀式をずっと、願かけ巡りをしています。

こういう風景、こういう日常が今、唐桑から唐桑半島で今も見受けられますが、これは裏返してみれば、海仕事というのはいかに自然相手の厳しい仕事であるのか、そういったことを感じさせるし、しかしそこを生きていくために必要なもの、そういうものをお互いに支え合ってやっているという、そんな姿が感じられもします。

リアス、これは牡鹿半島あたりです。何のことはない、きれいな風景と僕なんかは見がちであります。このこういう風景、例えばこうなんです。これは牡鹿半島寄磯浜です。こんなふうに見える、こういうところが漁場なんです、沿岸の漁場。そうするとこういう岩場のところには、赤魚の刺し網があります。磯物が獲れます。例えばここには刺し網があります。定置網があります。水晶網っていう定置網が小さな、こんなふう、全部ここは仕事場であります。イカ釣りはこの辺でやります。この辺は刺し網等々。これがいわば708キロ、828キロすべてではありませんが、漁師さんたちが仕事をする場所だということです。

これを獲り尽くしちゃったらいけないから、そのためにこういう1月から、例えば流し網ではマスを今ごろから始まります。ブリが来ます。マグロ、タラ、カレイ、目抜け、サメ、カツオ、カレイ、イカナゴ、マス、貝類ではウニ、アワビ、蛤、貽貝。そして海草はフノリ、マツモ、ひじき、ツノマタ、昆布、岩のり、こういった、そしてタコやナマコやホヤであります。ホヤも今養殖に入りました。これは本吉町史から引用したんでつくったものなんです。こんなふうなことをつなぎ合わせながら、その浜、浜ごとの漁業条件によって、日々の営みを続けているというのが沿岸の暮らしの基本だ、というふうに言ってよろしいかと思うんです。

これは定置網です。それを準備する人々であります。一家とチームワークであります。チームワークが悪いとだめなんです。一見すると漁師は競ってばかりいるように見えるけど、競いつつも支え合い、つながり合い、浜の絆はいまさら言われるもなく、強くなければやっていけない。協同性の非常に強い、高い、それが前提であります。自分だけが抜ければよい、そういう精神を誤解されるときがありますけど、決してそれは競う姿の一部を見たのであって、本当はお互いがよくなっていく。それが海辺の精神文化だというふうに言ってよろしいかなと思っています。

これは海草です。いわ魚獲れたらもう帰つちやいますので、女性たちは最後まで獲っています。これはふつうのマツモです。2時間だけです。男衆は1時間ももしないでもう、飲む、獲れたらもう帰つちやいます。女性たちは最後まで獲っています。冬はこれ海苔です。もうそろそろ海苔があるんですが、ここから帰って来る、そして来るときに、この辺に流れ昆布を拾ったりしています。これは夏のホヤ漁です。これが今盛んに浜、これが一番生業としては復興の早かったワカメ、これからボイルするわけです。

こういうことを繰り返し続けていること。そのためにお互いがつくり上げたルールがあります。それは漁具漁法をきちっと守ること。効率性だけに走らぬこと。例えばアワビは潜水具を使ってはだめ、ヤス取りはだめ、マツモは手取り、そういったのみ以外はほかの漁法で獲ってはだめ。機械でやっちゃったらそこにもう資源はなくなっちゃったりします。その背景には、みんなで資源を管理して、欲張らずに、これを獲って生きていけるようにという思いがこの背後にあります。

大きさによる漁獲制限もあります。アワビであれば9センチ以下のものを獲ってだめ、タコも同じ、アサリも同じ。宮城県であれば、磯浜、亘理、山元町磯浜のホッキ漁が、この制限をきっちりしたために、いいホッキが育つようになって、そして評判を呼び、それがみんな競わずに、資源を上手に管理する。いわば資源管理型漁業のお手本のようなところでした。それをずっとリードされたリーダーの鈴木さんは、今回の津波でお亡くなりになりましたけども、そういう方々からたくさん、海とつき合って生きていく人生とか、何が大事かっていうことを、各地で教えていただいた、その一部を知ったかぶりして、今日も報告させていただいているということでもあります。

そして漁獲できる期間、アワビ、ウニ、ホヤ、全部にいつからいつまでという時間制限があります。日にち制限もあります。でも日にちが決まったら自由じゃないんです。そのために開放、浜開けと言いまして、お互いに今日はいいぞと。この期間のうちの何日、いつの何時から何時までという厳しい漁獲制限があります。そういうことを守らないと浜では生きていけないんです。

自分だけがいいという企業論理みたいなのを排斥はしませんけども、それを守れなかったら、つまり大儲けするための漁業、願いはするけども、そうならないのが自然を相手の仕事だということをわからないで、変な政策をやるおっさんたちがごろごろおりますけども。イロハがわからない人たちの計画はちょっと困ったもんだなと思いますが、今日はそういうことを先に言ってしまうと、しらけますので、とりあえず脇に置きますが、そうやって獲ったもの。これはウニを獲る、こういう二股のこれだけです。これ以外で獲ってだめなんです。時間が1時間です。唐桑半島だと大体ひと夏に多くて5回だけです、5日延べ5時間しか獲れないんです。

だからそういう意味で乱獲にならぬように、資源を大事にするように、これが口だけのエコロジストではありません。そうしなければ自分たちの暮らしにつながるということ、よく考えているのです。このイロハをわからないで、経済性ばかりで復興を考える人た

ちがいますが、これは少し、もういっぺん勉強し直してから、復興計画を練りなおしてほしいと思っています。

合わせてもう1つは、海は非常に律儀と言いましょうか、自然を相手なので、板っこ1枚地獄という、板一枚というふうにいわれるように、いつも漁業は死と隣り合わせという危険性をはらみますので、非常にある意味で、自分の身を律して、多分何々してはいけない、こうやってはいけない、そういう身を律する精神性が非常に強いのです。

金物をあんまり持って乗るなどか、金物を海に落とすと、海の神様が怒るぞとか、いろんなものがありますので、身を律しながら、いろいろやっていますし、先ほど言いましたように、講というものを、契約講をベースにつながっていますから、伝統的な文化みたいなものを軽んじません。農山村ではつつい消えてしまったものを、それを大事なものは大事だと、頑なに伝統文化を守り続けているのも海辺の人だなど、私は感じています。

これは北上町の釣石神社の大祭です。こういうものを、そして例えば12月31日、浜の人たちは次々に夕方4時ぐらいになると、お神酒とお膳と注連縄を持って、てんでにやって来ます。この船にお船霊様（おふなだまさま）がいますので、それにご飯をどうぞ食べてください、献膳、膳を献じると書いて献膳。そしてお正月様を迎えるのを欠かしていません。

3. 11のその年の12月31日、私はそれまで十数年、こういう浜の大晦日をずっと訪ねてきましたので、さすがに今年はないだろうというふうに思っていたら、やっぱり10組くらいの家族が船も少ないのに、こんなふうにしていました。ここにお船霊様、安全を守ってくれる、大漁を支えてくれる、こういうのがあります。

これがお船霊様に載せるアワビであるとかご馳走です。我々が神棚にお供えすると同じように、船にお供えをするというふうにお考えになっても間違いではないかなと思います。こういうものを欠かさずに、大事なことは絶対大事だという、そういうものを持っているのが浜の人たちだと思っています。

そしてこういうかけざかなというものをつくって、年末年始はもう魚は獲らずに、これをみんなに振る舞い、家族が食べ合っている、そういう食の営みもあります。そしてこれは釣石神社のところで、田んぼに恵まれなかったせいで、アワやヒエが基本だったので、アワやヒエがたくさん取れますよという願いをこういうようにかたどって、今年も豊作であることを祈る、これを欠かしていません。

繭玉もつくり、お幣束もつくり、浜神様にお膳を上げる。浜神様を博物館でしか見たことのない人、現実にこうやって家々が大事に、我が暮らし、我が命を支えてくれる神様に感謝し、祈りを捧げている。それが海辺の暮らしの精神性の根底にあるなど、私は感じています。そこに東日本大震災が襲いかかったというふうに、私には感じます。

私はもう1カ月後、たくさんの知り合いが被災したことを知ってから、怖気づいて出かけることができませんでした。1カ月後、4月の10日11日思い切って行ってみました。その前、電話が通じた人たちからは、もう二度とこんなところには住みたくはない、来た

ってどこが家だかわからないから来ないでほしい、そんなことを散々言われて、なかなか出かけられなかった。

行ってみると、ガレキを片づけながらこう言うんです。みんなこんな状態だから当たり前です。こうだった状態から、これは石巻の1カ月後です。冷凍冷蔵庫が全部電源を喪失して、毎日毎日こういう冷凍とか、腐り始めたのを油紙とかビニールを外して、捨てるためのむなしい作業を延々と続けていました。

これは女川です。火葬場がありませんから、場所がありませんから、公園をこんなふうには仮土葬の状態にせざるを得ないような、ぎりぎりのところですよ。今は現状に復元されています。これが仙台の七郷なり、米どころの平野部の姿です。そこにこれだけのガレキ。今も遠くから見ればきれいになっているように見えて、近づけば、小さな細かいガラス破片、あるいは小さな釘、いろんなものがあって、大変まだまだ復旧というには、そう言えない、そんなところでもそれでももう一度頑張ってみようという動き。

これは気仙沼で、これは唐桑半島。こんな状態。これは漁港の建物に漁船が突っ込んでしまったんですね。全部のことは言えませんが、気仙沼の被害を言えば、死者・行方不明者で1,500人近いんですね。そして多くの2万を超える損壊があり、35%の9,500世帯が被災をしました。事業所の8割が被災をし、従業員の83%が被災し、漁船は85%の漁船が失われたわけです。

これが失われたってどういうことなのか。そのことをもう一度改めて、ただ、また漁船つくればいだろうではなく、ものだけではない、失われたもの。それは後ほどお2人がお話しいただけると思います。1週間前、これは報道があんまりされていないとさっき言ったもの。総務省が24年の10月に実施し、3月8日に発表した、ついこの間のデータです。

震災前に岩手は75,600人いた農業者が60,300人、15,000人仕事をやれないでいる。漁業は9,900人だったのが5千人なり4,900人が、仕事がやれないでいる。宮城は農業5万人が46,000人、今4,000人が農業できないでいる。漁業は11,100人いたのに、今2,800人だけです。8,300人はできないでいます。福島、そういう意味で漁業、農業、一次産業の被害というふうに僕はまず、第一義的に死者の92%が水死といわれるように、海辺に、そして田んぼで畑で仕事をしている人々の暮らしがいっぱい失われたんだなということを、これが先ほども出ましたその前の数字でありますけども。これがいまだ、まだ、仕事を戻せずにいるという状態。改めて何が失われた。たくさんものが失われたんだけど、私は私なりに言うならば、自然とともに生きる人々、その仕事と暮らしが失われたんだというふうにまず考えたわけです。

それは裏を返してみれば、漁業農業という産業として捉えるだけではなくて、それは私たちの食べ物、食生活、食を支えてくれる人たちの被災なんではないか。どこか遠い問題ではなくて、私たちの魚や、私たちのお米や野菜や、そういうものを支えてくれている人たちの被災なんではないか。そう捉えるところから何か私はこの復興というものを、もう

一度捉え直したいというふうに思っています。多くが高台移転であるとか、そういった何か、遠くからの目線も見えるみたいなことがありますけども。

そして歩けば歩くほど感じるのは、いわば問われているのは、私たちの食料とエネルギー、今のままでよいのか。お前たちの食べ物はこのままで大丈夫なのか。そんなふうに思います。食料自給率は39%です。60%を海外に頼り、安けりやそれでいい。昨日あたり、参加表明が出たTPPもまたそういった判断の上に出たような気もして仕方がないわけです。

そしてエネルギーの自給率は原子力を除けば18%です。しかし原子力を外すと4%なんです。エネルギー自給率4%の日本、食糧自給率39%の日本、人間が生きていく上で一番大事な社会資本、食料とエネルギー、これを人様任せでこのうと生きていって行けるのか。そんな問いというふうにも、私には感じられるわけです。

内訳を見ていきます。エネルギーのことはちょっと今日脇に置きますが、食糧自給率は北海道は173%、北海道民の1.7倍の食料が、カロリーベースですがあります。東北はこんなふうにもいろいろあります。全部合わせると109%になりますから、ここは東北の950万人ぐらいの食料はかろうじて賄えています。

賄えていないのはどこか。その代表がここです。東京1%です。横浜のある神奈川、2%です。大阪2%です。こういう人たちが中心になって、食べ物は買うもの、育てつくるもの、そんなイメージを全部押しやって安く買えるもの、新鮮に買えるもの、安全に買えるもの。全部商品としてばっかり見るようになっていっている。

私たちも気づかないうちに、そのわだちの中にはまり込んではいないでしょうか。食べ物は誰かが船を出し、沖を目指して網を入れて、それを引き揚げなければ、私たちの食卓に魚はないし、誰かが耕し、種を蒔き、苗を育て、間引きをし、支柱を立て、収穫作業がなければ、私たちの食べ物はないんだ。食べ物は自然を相手につくり育てるものだというのを、忘れてはいないだろうか。そんな思い、しきりにするわけです。

宮城は231%の魚の自給率があるんです。青森300、岩手200、ほかは少ないですけど、日本全体がこんなもんですから、いかに東北が浜の力、浜に生きる人々の力で一生懸命私たちの食べ物を支えている。そういう人たちの被災なんだというふうに、僕は考えたいです。しかしその漁業の人たちも実はずっと慢性的に、人が減り始めて、今2011年177,000人だけです。

1億2,800万人の魚を17万人で懸命に支えています、いつまで支えられるでしょう。その年齢を申し上げます。177,000人の漁業者の半分は60歳以上だということです。40歳以上を合わせると80%を超えます。次の若い世代の魚は誰が獲るんでしょう。なぜ若い人はこの仕事に就けないんでしょう。農業も同じテーマを持っていますが、それはあまりに低い労働評価だからです。

そこで私はいろんなデータを駆使して、漁師さんの家計簿を調べてみました。消費者というのが98%のこの国において、何でも消費者中心主義がありますが、自分たちの家計簿

も気になるんなら、生産者の家計簿もちやんと向かい合うべきではないのか。それを言えば、漁師の沿岸漁業の漁師たちは500万、600万、600万。平成21年は621万の水揚げ金額でした。しかしそれに支出があります。398万です。雇用労働賃金、手伝いの人に払う48万。油代69万。様々な修繕費等々やると、398万円になり、結果手取り222万。これが日本の海で働く沿岸漁師たちの平均的な収入です。実働162日です。それはしける日があったりするということの意味します。毎日毎日働けるわけではないんです。

そうじゃなくて、実はもう1つ、養殖も宮城の大きな力です。宮城は北海道、長崎に次いで第3位の水産県であります。時々長崎を抜いて第2位に行ったりもしますが、そういうところ。そうすると養殖の人たち、ホヤとかカキとかホタテとか、あるいはワカメとか昆布なんかの養殖をやる人たちの売り上げは1,900万ぐらいあります。しかし支出が1,500万。実質は380万です。雇用労働賃金198万。これが地域の人たちに支払われるお金でもあります。それに油代が128万、100万近くかかるんです。そんなふうにしなから、しかも低気圧が来て、いかだが流される。いろいろなリスクを背負う。そんなふうにしなから、私たちの食べ物を、水産物を産み出してくれているのです。

どこやらの知事が何か特区なんて寝言を言っていますけども、気仙沼・石巻にも大きな法人の企業の力がいっぱいあります。その人たちが頑張っているデータを言いますと、会社経営体としては漁船漁業、カツオとかマグロですか、3億の売り上げがありますが、経費が3億を超えています。だからずっと慢性的に赤字なんです。どんな漁業をやったら企業化できるようになるんでしょうか。それを問わずに、システムだけ導入みたいなのは寝言だという理由なんです。それだけ採算合える魚価が今、補償されていますか。

震災復興っていうのは一体何なんでしょう。考えれば考えるほど、世に流布されているものと、私が見る浜の人々の姿の間にギャップをうーんと感じてしまいます。そして出てくるのは、全部産業論と経済です。人間の姿が少しも見えないんです。誰が魚を獲るんですか。誰が網を入れるんですか。誰が網を引き上げるんですか。そのことを除いて、いかにも経済と産業の言葉ばかりで、創造的復興だとか、つまらない言葉でごまかしているように、私には見えて仕方がないわけです。

僕はたくさん海辺に暮らす人たちの声に、もっともっと耳を傾ける必要はないだろうか、そんなふうに思いながらいます。こういう人たちです。言葉は上手じゃないかもしれないけども、ちゃんとした考えを持って、そこで海で生きてきたのです。去年の暮れ、今から3カ月ぐらい前の12月31日、寄磯浜、まだ海のガレキが片付ただけで岸は、沈んだままです。船はここに着けられないから、こういうところにみんな、ここに船、小さな船で行って、向こうに出ていくわけです。

海は季節、季節にいろんな仕事があります。これを待たずに動き始めました。そして何はともあれ、この大杉大明神にもう一度お祭りを復活させ、神を強め、そして海仕事を始めています。鳥居も流されましたが、赤い鳥居だけが鳥居ではない。もともとの形のこういうものをやりながら、神様どうかよろしくお願ひしたい。もう一度ここで頑張るので、

という思いでしょうか。こういうのがここ数カ月見えるようになりました。

そしてもう二度とこんなところ住むのはいやだと言っていた人たちが、訪ねるたびに、ここが本当にこんなガレキだらけのみっともなくなっただけでも、本当はいいところなんだよって。そのいいところというのを、僕ごときでもわからないんです。でも多分、そのよいところを取り戻していく。よいところを取り戻していくのが復興なんです。そのよいところを誰がわかっているんでしょう。

そして始まりました。これは牡鹿半島とか、雄勝あたり歩くと、ガレキが片付いたところ、海辺にこんな花を、ここもつくって、花を植え始めています。これはユリが崖に咲いています。こういうところにも花は植え始めました。シュロの木は折られ、木は倒されましたが、花を漁師が植え始めました。こういうところに土を持って来て、花を植えています。

海辺にとって花とは何なんでしょう。それは単に鑑賞のための花じゃないんです。菊の花が咲くと、ぼつけが獲れるようになるよ。藤の花が咲くと、そろそろタイが釣れ出すぞ。菜の花が咲くと、カツオ漁の準備が始まるぞ。花を見ながら、花暦を漁業用暦にしている。これが浜の心です。それがあちこちに花を植え始めた風景にこのごろ出合うようになりました。

もう一度、もう一度、俺たちはここで生きるぞ。そう思っているようなメッセージとして私は受け止めています。その人たちのその思いを実現するために、高望みはそんなにしていません。私たちはできることあるんじゃないのか。国や経済界や巨大な大きな力だけが復興への支援ではないと思いたいです。

私たちは、おい、俺たちのために魚獲ってくれよ。もしここにいる100人の人が浜の漁師さんに、俺たちの魚獲ってくれよと言って、もし5千円ずつ渡したら、漁師は張り切ります。任しとけ、こう言うでしょう。小さな力を集め、立ち上がろうとする人たちの支援になるような、そんなものを今日お話し合いできたらいいなと思って、ここに参りました。終わらせていただきます。ありがとうございました。

網島 限られた時間の中で、浜でくらすこと、漁をすること。私達にはなかなか見えなかった根元的なところもするどく指摘いただきました。どうもありがとうございました。では続きまして、渡邊眞紀さん、よろしく願いいたします。

「地域の文化、新たな縁」

三陸新報社専務取締役 渡邊眞紀

はい、皆様、気仙沼市と南三陸町をエリアとして、ローカル紙を発行している三陸新報の渡邊眞紀と申します。今、結城先生がいろんなことをおつしやってくださったので、何か私がこれからお話しすることでもいいのかなと思いつつ、悩みながらとりあえずまとめたこととお話ししたいと思います。今回、「地域の文化、新たな縁」というテーマをいた

だいておりますが、震災から2年あまり、テーマに沿ったお話ができるかどうかわかりません。ただ、震災後に私が全国からいただいたご縁などを織り交ぜてお話ししたいと思っております。

大震災に際しましては、たくさんの方々に様々な形でご支援、ご協力をいただきましたことに、まずはお礼申し上げます。初めに震災時と現在の気仙沼市について、少しお話ししたいと思います。気仙沼市は沿岸部の他地域と同様、東日本大震災によって人口がかなり減少いたしました。震災の前年の人口は74,446人でしたが、今年2月末現在では69,089人になりました。震災で、気仙沼市でお亡くなりになった方が3月7日現在1,040人。いまだ行方不明の方が240人。身元不明の方が8人。震災関連死の方が105人となっております。

震災で亡くなられた方たちを含まなくても、既にこの2年で4,000人近い方々が他地域で暮らしているということになります。仙台市を初め、ほかの地域に移っていらっしゃるということです。中には住所を移動しないまま、お子さんのところにいらしていたり、ということもたくさんあると思いますので、実際に気仙沼市にはもっと少ない人たちが住んでいないと思います。

現在、市全域の沿岸部ではおよそ70センチ以上が地盤沈下しています。おかげさまで道路はかさ上げされておりますので、車は随分走らせやすくなりましたが、満潮と大潮が重なりますと、今でも内湾近くの南町・肴町・内ノ脇地区を初め、片浜地区など多くのところが水で覆われます。震災当初は満潮時になりますと、市内から船で25分のところにある大島地区を行き来するには、長靴がなければ連絡船に乗れませんでした。

しかし少しずつ多くの方々の努力で復旧をしてきています。震災前、小社が発行した新聞、三陸新報は23,500部で、配達エリアは気仙沼市と南三陸町の1市1町でした。震災時には10,000部まで減りましたが、現在はおかげさまで、仮設住宅の方々にも取っていただいておりますので、20,000部まで復旧することができました。

ただ、残念なことではありますが、南三陸町志津川地区にありました我が社の営業所が、すべて流されてしまいました。また現在、雇用が確保できないという状況にあり、小社の取材配達エリアである南三陸町内では歌津地区だけの配達となっております。志津川地区は配達できない状況にありますが、これは小社の今後の大きな課題となっております。

小社は1つの建物の中に、三陸新報社と三陸印刷株式会社の2社が仕事をしております。新報は35人、印刷は27人。そして出店の新聞販売店に41人と配達・アルバイトの者たちがおります。震災発生時には、川の近くにありました販売店の者たちをすぐ迎えに行きましたが、そのときには干潮と一緒にになったこともあり、既に川の水が引いておりました。当日は被災した者やその家族、家に帰れなかった社員など30人ほどが社内に泊まりました。

誠に恥ずかしい限りですが、会社には非常時の用意が何一つありませんでした。近くの被災しなかった社員が布団と手動式のストーブを運んでくれて、岩手県の社員が自宅に戻って、おにぎりの炊き出しをしてくれました。輪転機が壊れ、電気もありませんでしたが、

機械に詳しい者がいたおかげで、電源を車のバッテリーから取り、パソコンとプリンターをつなぎ、2日間、A4版の特別号をつくりました。

それがこの大きさのA4版の新聞です。これを2日間つくりまして、いろいろ避難しているだろうという場所や何かにみんなで配りました。2日目、我が社は日曜日が休みなので、月曜日休刊となっております。この2日目の新聞を東北電力気仙沼営業所所長にお持ちして、ライフラインの欄を指差しまして、「よろしくお願いします」とだけお話し、社に戻りました。

月曜日夜方、電気保安協会の方がいらっしやって、「この周辺は異常がないので、電気を復旧します」と話されて、我が社はおかげさまでその夜から電気が復旧いたしました。しかし輪転機や版をつくるCTPという機械は故障。火曜日はコピー機でA3版の裏表をつくりまして、1千部ほどつくりまして、会社に泊まっていた者、また出社できない者もおりましたので、出社した者たちとともに、避難場所や何かに貼らせていただきました。

別会社であります。同じ建物に三陸印刷が入っていたおかげで、その後3月中の新聞は紙からはじめ何から何まで印刷におんぶして刷ってもらいました。印刷のほうも大型機は全滅でしたが、A3版をつくる小型機と、小さな版をつくる紙版機が動いたのです。A3版しかつくれませんでした。そのおかげで震災後も、新聞を1日も休むことなく発行することができました。

初めのうちはこの新聞を発行するときに、何を載せようという話題にみんなでなりました。とにかく避難者名簿が絶対必要だろうということで、避難者名簿を刷り始めたんですが、これは会場のほうからちょっと見にくいと思いますが、裏表に載って、もうこれでもほんの一部しか掲載ができませんでした。

それで3日間は避難者名簿を掲載させていただいたんですが、このままでは避難者名簿を皆さんにお知らせすることができないということで、電気がついたおかげで大きな新聞のコピー機が動きましたので、その大きな新聞のコピー機に新聞の大きさのブランケット版なんです。そこにとにかく来ている者たちで、パソコンの打てる者で、すべてを避難者名簿を刷りまして、打ち込みまして、それを徐々に避難者がいるところに、学校とか市民会館、そういうところに貼り出させていただきました。

私事ですが、漢詩に節をつけた詩吟というものに関わっております。最盛期には市内に180人ほどの会員がおりました。震災前でも100人近くの人たちが会に所属していましたが、亡くなられた方もいて、現在は50人ほどに減っております。もちろん震災後はお稽古ごとではありませんでしたが、全国全世界から駆けつけてくださった歌手の方や音楽家、ものづくりの方々、随分癒されました。

人は朝起きて仕事をして、寝るだけでは生きていけません。そこに何が違った色のものが入ると元気になれることを実感しています。震災の年の9月に吟を練習せず、おしゃべりだけでもと、内湾の高台にあって、難を逃れた自宅を開放しました。皆さん、熱心に通ってください。息子さんの住む宮城県大崎市に移り住んだご高齢の方がいらっしやい

ますが、3時間以上かけて、「仲間がいて嬉しい」と今も通い続けてくださっています。

毎年行われていた文化祭が昨年2年ぶりに気仙沼市で開催されました。何かを見ることだけでも癒されますが、参加することによって、私たちもより多くの元気をいただくことにもなりました。今回のテーマにあります文化と一口に言いましても様々です。気仙沼市では各地区で子どもたちの太鼓なども盛んです。様々な団体が全国各地に呼ばれて、ご披露させていただきました。

先日も早稲谷という地区の、県の無形民俗文化財に指定されています獅子踊りが、東京国立劇場での民俗芸能公演に出演させていただきました。地域に伝承されてきた文化を、いかにして伝えていくかは震災前にしましても、震災後にしましても大きな課題です。子ども時代に熱心に憶えたことでも、高校を卒業、気仙沼から外に出てしまえば、指導者がいなくなります。これは震災に関わらず、どの地域でも課題の1つだと思っています。

私が震災後、関わらせていただいたことの1つに、気仙沼市大島の「みちびき地蔵」という絵本があります。昭和50年代にテレビの日本昔話で取り上げられました民話ですが、震災後、海外の人たちからインターネット上で、今回の津波に似ているというふうな話題になりました。そこで友人である気仙沼大島観光協会長から、みちびき地蔵を再建するために、絵本をつくりたいが、誰か作家を知らないかと相談されました。

震災から様々な支援をしてくれていた和歌山県に住む墨彩画家の友人に、すぐ連絡を取り、ボランティアで絵を頼み、文章を私が担当しました。我が家に宿泊しながら、2人で取材をし、地元の言葉や風習、その土地の名前を使用して、新たに作成しました。おかげさまで本の収益金で、津波で流された大島のみちびき地蔵は同じ場所に復元されました。

この建立のときに、市を挙げてご協力をいただいたのが、京都の綾部市でした。携わる大工さんが忙しくて、お堂まで手が回らないときに、小社と同じ綾部市のローカル新聞社『あやべ市民新聞』の社長に宮大工さんをご紹介いただくつもりでご相談申し上げました。早速ご紹介いただいた上に、お堂建設予算をオーバーした分と運搬費など、綾部市民の方々に呼びかけてくださり、運搬費と維持費までたくさんの寄付とともにお届けいただくことになりました。

おかげさまで昨年10月25日、綾部市の10人の方々にもご出席いただき、地蔵堂が大島のもとあった葦の脇家というところに建立されました。この4月には綾部市から気仙沼までツアーを組まれるようなお話も伺っております。今回、みちびき地蔵の絵本を作成したことで、たくさんの驚くご縁をいただきました。

毎年、東京目黒区民祭りに参加して行われる「気仙沼サンマ祭り」があります。震災の年もぜひともお礼をしたいということで、会長以下、皆様が駆けつけて、サンマ祭りを行いましたが、私も絵本を購入していただくために参りました。その折、目黒区の点字の会の皆様が本を買ってくださり、のちに絵本を点字訳してお送りくださいました。

その事務局の方とお手紙のやり取りをしていたのですが、40年ほど前にその方が私のいとこのお仲人をした方でした。全く知らなかったのですが、私も結婚式でお会いしており

ました。たまたま気仙沼産の笹かまを持って、いとこがごあいさつに伺ったとき、なぜ気仙沼？というふうになり、私の話で盛り上がったといところは興奮して電話をくださいました。

みちびき地蔵の関係ではありませんが、もう1つご縁をいただいた話をしたいと思います。気仙沼市出身の舞台女優である吉田葵さんが震災前に、愛媛県の坊ちやん劇場というところで主演をしたことから、ご縁をいただいた産経松山支局の記者の方がいらつしやいます。震災後、その記者の方からお声をいただき、松山市にある「坂の上の雲ミュージアム」に出かける機会をいただきました。

その折、愛媛県で行っている愛育基金を知り、気仙沼市の県立高校で先生をしている友人に連絡をいたしました。するとたまたま、松山市に出張というときで、そのまますぐ詳細を聞いていただくことになりました。不思議なめぐり合わせで、この1月10日から54人の高校生と先生方が、3泊4日の旅を愛媛県からプレゼントしていただくことができました。

今年度も愛育基金は続けられるということで、同高校ともう1校、私立高校の旅企画が現在進行中ようです。1月に県立高校が出かけた際に、ミュージアムで松山出身の文人秋山好古の5回目のバースデイコンサートが行われました。今度はそのときに出演していた左手のピアニスト智内威雄さんと吉田葵さんのコラボコンサートが企画され、気仙沼で10月に開催されることになりました。そのときには愛媛県から気仙沼までツアーをしてくださるとい話も進んでおります。

本当に人のご縁とは驚くばかりです。私1人だけでもこの2年の間にお話しし切れなほど、たくさんのご縁をいただきました。震災は未曾有の出来事でした。しかし震災がなければ、恐らく一生お会いすることがなかったというか、親しくおつきあいはなかったと思う方々とのつながりがたくさんできたことも事実です。今も、そして感謝の日々が続いております。

気仙沼市はマグロやカツオ、サンマなどの水揚げで全国でも有数の漁港です。これに付随して大漁歌い込みや七福神舞い、出船送りなど受け継がれているものがたくさんあります。これらもちろん文化の1つです。農業に携わる方々もたくさんおりますが、震災前も震災後も漁業や水産加工業が中心の我が町では、基幹産業の復興が何よりの課題でした。土台がしっかりしていれば、いろいろなことも展開しやすくなります。

おかげさまで多くの方々のご努力によって、カツオの水揚げ数量は一昨年も昨年も全国1位となりました。これは16年間続いています。但し、震災前に比べますと3割程度の水揚げ量です。ただ、水産加工業は販路を改めて探さなければならないという問題が現実に出ています。復興が遅れば遅れるほど、大変さが増しています。気仙沼市立病院も三陸道も、震災前には考えられなかったような形で早期完成を目指して進められています。

ありがたいことだとは思いますが、宮城県では二次医療圏を統廃合して、4月から7ヶ所だった医療圏が5ヶ所になります。気仙沼は石巻圏域に入ることになりますが、三陸

自動車道が完成しても、1時間以上を要するということになります。また気仙沼線が震災でなくなっておりますので、車のない人は石巻まで出かけることが大変です。BRTが導入されていますが、乗り継いで、乗り継いで、仙台まで来るのに4時間近くかかります。

新病院にはヘリポートができるようですが、場所によっては市立病院まで30~40分ほど要する地域もあります。せっかく新市立病院ができて、多くの問題が山積することになります。菅原茂気仙沼市長も「石巻との連携は現実的ではない」と訴えたと聞きます。せっかく新病院ができて、医療が受けにくいという理由で、気仙沼が過疎化に進む懸念があります。

現実には高齢者の方々が病院の便利なところに転出しているという実態があります。県には本当に被災地の声を受け止めていただき、何かことを進めるときには、その地に住む人々の声を真筆に聞いていただきたいと願ってやみません。

国や県と被災地とのギャップがたくさんあり、牛歩の歩みは進んでいますが、復興にはほど遠いのが現実です。歳月だけが過ぎて、元気をなくすご高齢の方々もたくさんいらっしゃいますし、日々を重ねるごとに同じ被災者でも温度差が出てきています。今後の大きな、大きな課題となっていると思います。これほどの負を経験したのですから、新たに街を築くときには、ぜひその地に住む人々に寄り添った形で進んでいただきたいと思います。

地主さんが全く知らないうちに、集団移転場所が決まってしまったり、道が決まってしまったり、防潮堤、今問題にもなっておりますが、防潮堤が決まったりということのないように、くれぐれもお願いしたいと思います。時間のなかで、被災地の人々の気持ちをくみ上げながら、事を進めるということは、本当に大変なことだと思います。外から応援に来ている自治体の方々がたくさんいらっしゃいますが、その方たちが皆さんに説明をしたり、というふうな不具合もあります。

知らないままになっていることがたくさんあります。そこに住む人々の意見をぜひ聞きながら、将来のためのまちづくりを関係各位にはお願いしたいと思います。いろいろなそういう声をお話したいと思うことと、震災を忘れないで、現地を見ていただき、皆さんが震災に遭ったときにどうすればいいかということ、身を持って感じていただきたいと思い、今日のシンポジウムに出席させていただきました。終わります。

網島 どうもありがとうございました。まさに被災者ならではの、地域ならではの新聞社の奮闘ぶり、そして私たちが気づかない、やはり被災地の問題点、そういうものを語っていただきました。どうもありがとうございました。続きまして今日欠席の武内さんのメッセージを朗読いたしますので、どうかお聞きください。

司会 私のほうから代読させていただきます。

会場の皆様へ、石巻日日新聞社武内宏之。

本日は欠席することをお詫びいたします。石巻日日新聞社は昨年11月に石巻NEWS、

e e という施設を石巻の市街地にオープンさせました。この施設では震災直後に号外として発行した手書きの壁新聞、震災直後の石巻の様子を写した写真。石巻の百年間をたどった年譜や写真を展示し、公開しています。私はこの石巻NEWS'e e の館長を兼務しています。

16日に福島県や山形県から約100人の団体が来館されるとの申し込みが急に入り、スタッフ1人では対応し切れないことから、急遽私も来館者の対応に当たることにしました。

改めて石巻日日新聞社を紹介させていただきます。私たちの新聞社は宮城県石巻市に本社を置き、隣接する東松島市や女川町の2市1町に新聞を発行している地域新聞社です。大正元年に創刊し、昨年100年目を迎えました。平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、津波は社屋へ押し寄せ、新聞発行システムは使えない状況に追い込まれました。その状況下で社長が残っていた社員に向かって、「地域の非常時に新聞を発行しないで、何が新聞社だ！何もしないのは自分たちで自分たちの存在を否定することだ！」と叱咤激励をしました。

この言葉は諦めかけていた社員に、新聞人であることの誇りを呼び覚ましました。若い社員からは震災とはいえ、自分たちの代で新聞を発行しなかったという記録をつくりたくない、ならばどうすればいいんだ？といった話になりました。今思えば、自分たちで自分たちを追い込んでいったのでしょうか。もがいた挙句、社長の決断で手書きの壁新聞でいくことになりました。

水に浸らなかった新聞用紙とフェルトペンをかき集め、6日間、避難所やコンビニの店頭に貼り続けました。会社に電気がきたのは3月19日でした。輪転機は何とか動き出し、以来配布エリアを広げ、新聞を避難所に無償で配りました。この活動は避難所が閉鎖された秋まで続けました。震災から2年が過ぎました。今、私たち石巻日日新聞社の人間には、震災でも新聞を出し続けたことが誇りとなっています。

石巻では本格的に復興が始まろうとしています。私たちはこれからも新聞を発行し続けることで、ふるさとの復興に貢献していきたいと思っています。どうぞこれからも被災地のことを見守っていただければと思います。以上です。

網島 どうもありがとうございました。日日新聞社の壁新聞は、初日は非常に大きな字で書いてありましたが、6日目には非常に細かい字になりました。それだけニュースがたくさん集まってきたということの証拠で、いかに記者たちが頑張って、また地域の方が頑張って、当日を乗り切った、生々しくわかる、そういう新聞です。ぜひとも足をお運びいただければありがたいというふうに思います。どうもありがとうございました。それでは今村さん、よろしくお願いたします。

「内陸部のくらしと地域文化からみやぎの復興を考える」

大崎タイムス社 理事編集委員 今村正誼氏

大崎市にあります大崎タイムスの今村と申します。よろしくお願ひいたします。今、日日新聞の武内さんの書いたメモを聞きますと、ドラマにもなりましたので、まさにドラマチックだなとは思いました。ただ、小さな資本の、小さな地域の新聞社は、本当に大変な中で努力しました。先ほど渡邊さんから三陸新報の話がありましたけども。1日も休んでいないです。何とか電源をどこかから確保しながら、動く機械を探したりと創意工夫を重ねられました。あるいは大船渡にある東海新報は宮城県沖地震があつて、その後、あの地震がもう一度、30年に90%の中で襲ってくるだろうというのを想定して、社内の多くの人たちの、株主の多くの人たちの反対にあいながらも、そこの社長は発電機を導入して、今回1日も休まず、輪転機を回し続けたという。これはやっぱりすごい新聞社というのか、新聞人魂だなと。

そういうことを言うと、「内陸の大崎はどうしたのかな」。大崎はその日は幻の新聞になりました。1日休んで、そして3日後にはやっぱり何かを出そうということで、A4版の号外を100部か200部、カラーコピーで印刷して出しました。これはその機械を持っているところを探す。人間関係を本当に駆使して、努力して、新聞人として、この惨劇をどうやって伝えたらいいのかという思い、使命感が強く働きました。

それは大崎地方という内陸部でも被害があの地震でも結構大きく、すごい地震だった。そして1万人以上の人たちが避難をしている。そういう現実はありました。ただ、そのほかに石巻のほうから、実は石巻日日新聞の関係者が、新聞出せなくてと言ひまして、カラーの写真データを、カメラを持参して送ってくれたんです。

それを何とかして、あの津波で被害を受けて、火災として、火災がまた追い討ちをかけたあの現場を、大崎内陸部の人たちに見てほしいというふうな、いわゆる懇願もありまして、私たちが一生懸命やっぱり新聞をつくるために汗を流したというのか、知恵を絞ったという、そういった事実もひとつご理解をしていただきたいなと思ひます。ただ、残念ながら、2年経つと内陸部とそれから沿岸部のいわゆる震災にかける市民の思いというのは、大分差があるなという感じがいたしました。

最近新聞をちょっと調べましたら、毎日の中で復興とか復旧とか、そういった軸が載るニュースがいくつあるだろうかと数えてみたら、多いときでも3本か4本くらい。ないときは1本くらい。ゼロというのはほとんどないけれども、そのぐらいの数でした。それでこれは風化したら大変なことになるなと。実は今年の夏でしたでしょうか。私は個人的な用事で、富山の高岡のほうに、高岡というよりも富山市もぐるっと回ってきたんですけども。

高岡に行ったときに、商店に入りまして、「どちらからいらつしたんですか」と言われたとき「宮城県です」と言ったら、大変驚いて、お見舞いの言葉をいただきました。そして宮城県のどちらですかということに、私は今でもそうなんですけども。住民登録は石

巻市で、東松島に家を持って、被災をしながら直して、今でも大崎のほうに通っているという身でありますので、石巻市と言いましたら、大変びっくりして、本当に向こうの人たちは、あの惨状というのか、沿岸部の惨状ですね、テレビで何度も何度も繰り返して見せつけられた。そういった記憶がありましたので、実は私以上によくわかっているような感じがいたしました。

そのときに感じたのは、宮城県の人が全国に行ったときに、「宮城県です」と言ったときに、あの一番、人が亡くなったあの宮城県ですねと言ったときに、「はい」のあとに会話があるのかなと思いました。恐ろしいのはその風化というのは、自分たちが鮮明にあのひどい状況と、それからその後、人々がどうなっているのかというふうなことを、きちんと記憶に留めておかないと、全国に行って、宮城の者として、この震災を語り継いではいけない。そう思いました。やはり宮城県の間人なら、宮城のあの被害をわからなきやいけないと。内陸部にいて、私はそういったことを感じました。

内陸部に住む者も等しく被災した宮城県民だと。沿岸部の人々の辛さや悲しみや、あるいは忍耐力、粘り強さ、諦めない気持ち。そして今、ちょっと教えていただきましたけれども、結城さんがどういった、いわゆる被災した人たちがどういった形でその土地とのなりあいを持って、いわゆる産業を育て、自分たちのいわゆる過去から未来へという歩みをしてきたのか、というふうなことまで含めて伝えられるだろうかということは今、非常に感じております。やはり記憶の風化をなくしたくないと、そんな感じで今います。

今日の私に与えられたテーマというのは、内陸部の暮らしと地域文化からみやぎの復興を考えると。大変難しい話でありまして、私が言うよりも、まさに結城先生が最初に話したところで、すべてが完結するような感じのテーマでありますので、私は特別何だりかんだり言えないなと思いつつも、少しメモ書きしているのか、文章にしてきたものを読みながらもう少し述べたいと思います。

今こそコミュニティだと。やはり先ほど復興の話が出たり、あるいは結の話があったり、いろんなつながりで地域が結びついて、人が育っていているという、その状況が浜に行ったときに、私のような全く知らない者が浜とかに行ったら、あの集落が全部なくなって、もう全国津々浦々というくらいに、本当に、先生あれですね、浜多いんですね。どこのところに行っても、物揚場があって、そういった漁業の営みがあった。

ところがそこに集落がすぐにはありませんでしたが、集落は、いまは流失してほとんどありません。みんな、どっちに行ったらのかないといえ、少し高台のところの仮設住宅にいて、そして浜に時々通っている。でも通っている人は私の見る目から見たら、ほんの少しだなど。つまり先ほどの先生の説明にもあったように、漁業者が、漁業している人が物すごく減ったんですね。現にそうですね、浜に行くときよくわかります。

浜の仮設以外に、どっちに行っているのかって言うと、それこそ何キロも離れた、例えば牡鹿の人、雄勝の人が何キロも離れた、10キロも10何キロも離れた旧河北町というところに行ったりですね、本当にそういうことではコミュニティが消えていっていると。近隣

関係がなくなっていると、そういう中で少し手つかずっていいのか、それでも近隣関係は壊れているんですけれども、内陸部の人たちがやはり今まである近隣関係をもう一度思い起こして、その大切さを見直しながら、被災地の人たちと向き合えないだろうかというの、今こそコミュニティだというふうな考え方であります。

浜の話がありましたんで、この間ぐるつと、ちょっと車を飛ばして行ってみました。雄勝に行きましたらやっぱり街は壊滅です。あそこに新山神社というのがあるんですけれども。これが真新しい洞というよりも、お社というよりも洞なんですけれども、建ちました。そして真っ赤な鳥居ではなくて、まさに白木の門が、門柱ができて、そして上を結ぶ。先ほどの映像にあるような注連縄飾りが張られていましてね。やはりこれは浜の信仰というのは生きているんだなということも、よくわかりました。

内陸部にいる人はそういった姿をぜひ見てほしいな。そんな感じがいたします。今日ここに大崎からも何人か来ているかもしれませんし、あるいは私たちの大崎タイムスの販売エリアというのか、取材エリアは栗原、あるいは登米、それから黒川郡と。大分欲張って、あっちこつちに行って取材活動しているんです。

見る人は見る、見ない人は見ないかもしれないけれども、そういった中には農村が持っているコミュニティというのか、あるいは隣近所のよしみを大事にする。村八分なんていう言葉もありますけども、火事とか葬式は別で、きちっとそこどころだけやっついこうという、そういったつながりがありますので、そのつながりがやっぱり産業に生かしたり、あるいは人の暮らしに生かしたり、あるいは被災地のために何かやれると。そういった力になっていけばいいのかなというふうなことを感じております。

それから私のメモというのか、文章の3つ目に、いい連鎖というのにも期待をしたいというのがあります。私は震災の年に、古川にある古川工業高等学校っていうのが、宮城県では育英か東北高校かといわれているあの強豪がある中で、公立高校の古川工業が甲子園大会の宮城県大会で優勝したんです。私は、これは火事場の馬鹿力なのか、あるいはかつて野村監督が言いましたけれども、「無形の力」という言葉がありますけれども。どんな力が働いていたかどうかわかりません。

ただ、古川工業が出て、翌年の去年の選抜に石巻工業高等学校が選ばれました。21世紀枠です。私はあの古川工業が石巻工業に、いい連鎖をしたなと思っています。

やっぱりそして、青少年というのか、古川の高校に通う生徒すべてではないにしても、いろんなところで、いろんな手伝いをしているのを見てまいりました。

被災の大きさは違いますけれども、あのとき何かやれるものはないかっていうふうなことで、壊れた家の後片づけをしたり、それからあるいは南郷高校とか、それから小牛田農林高校とかっていう学校がありますけれども、そういった学校の生徒がスケジュール組んで、石巻に行って、ボランティアで泥上げをしてきたり、もううずうずして、何かしなきゃいけないっていうふうな気持ちでございました。その気持ちがいい連鎖として大人にも、あるいはこれからの若い人たちにも受け継いでいってほしいなと、そういったことを感じ

ております。

また被災した石巻と内陸の大崎と、それから山形の新庄とそして日本海の酒田、それを結んでみちのくウエストラインって呼びながら、行政もあるいは産業界も手を結んでいこうという、そういった動きがまた震災後に活発になりました。もちろん、その後に自治体はいろんなところと災害時における業務の提携とか、食品の配置の提携とか、そういうのを結びまして、もちろんウエストラインもそういう中で手を結びました。

それだけじゃなくて、全国のいろんなところから、いろんな応援を宮城県の場合は、それぞれの町で、それぞれの行政で受けておまして、そういったところがこれからそのつなぎ、縁をどうやって継続していくのかというのも、内陸部にいる私たちもそれらに関心を持ちながら、そういったところに忘れないで伝えていければいいのかなんていうことも感じました。

震災時に大崎市には、最大時で1,200人の人が鳴子温泉に泊まりました。延べにすると約9万人です。2カ月も3カ月も逗留なさった人がおまして、そういう人は少し不自由な形で歩いていった人が、シャンとして帰って行ったという、嘘か本当かわかりませんが、そういった話も聞こえてまいりました。

そういったところではやはり休養地とか、心休まる、あるいは安らぎの、癒しの里みたいなものが内陸部と言っても、沿岸部と大した距離ではないところにあるという、その交流というのも今後もやっぱり継続する、いろんなやっぱり手立てを講じながら、私たちが忘れず、そして沿岸部の人たちもまた来ていただくという、そういった関係を結んでいければいいのかなというふうな感じがいたします。

一番最後のほうに、太古の昔は内陸部も海だったと。縄文時代に遡らなくても、1200年前のアテルイの時代、このごろいろんなドラマも出ていますけれども。すごく強くて優しいなど。それがやっぱり脈々と、東北人っていうふうに流れている血なのかなと、そんな感じもいたしております。400年前には政宗が宮城で行ったいろいろな施策があります。とにかくあのときの殿様は、全国どこを見ても大変な権力者でありまして、その権力者の意向というのは、いいか悪いか別にして、今にやっぱり残っているというのがすごいことだなというふうなことがあります。

そういった政治のリーダーシップが出るかどうかは別にして、古い歴史の中から、東北とは、あるいは宮城、そして我が町というのを見つめ直すのも、復興のまちづくりには案外遠回りのようにして、大事ではないのかなというふうな感じがいたします。

それとやはり4月から始まります仙台宮城ステイネーションキャンペーンには、やっぱり被災地を訪れたい、それで何もできないけれども、お金を落としたいという人たちが全国から来るだろうと。そしてそれを期待しながら、それぞれのプランを練ってお待ちをしているというのが今の状態です。

やっぱり来た人にはやはり被災地をきちっと見てもらう。内陸部にいても、見てきましたかというふうな声をかけて、それで見てきた人と会話がきちっとできるようなそういつ

た、いわゆる情報を大崎タイムスとしても発信をしていきたいなど。できれば内陸部にありますので、鳴子温泉での癒しは被災地を回ったあとの、癒された自分をぜひ鳴子温泉でとかですね。あるいは気仙沼のほうを回ったら、伝説の遠野を回って、世界遺産のほうを回れたら、より東北を理解しながら、被災地の実情を見れるという、いいコースがあるんじゃないかと。それにつけてもやはり目に見える復旧・復興というのは、はっきり言って、今の現在ではないのかなと思っています。

宮城県で七百数十億円が多分来年度に繰り越ししていくと。事業をやりたくても、やる人がいない。プランが練れない。それで計画をしているけども、実際は手続きのほうが進めんどくさいというのか、大変で進まない。いろんな問題を抱えておりますので、はっきり言って被災地を見て、形として、ハードばかり、箱物ばかりが復興ではないといえますけれども、その箱物でさえ、何にも見えていない。そういった中で少なくとも我々の心の中に、あるいは行動の中にこういった現状とこういった問題点があるということぐらいは整理をしながら、他の人と会えるということが大切と思います。

やはり宮城県人としての情報量をやっぱり厚くしていくためにも、地方紙というのは役割があるのかなと、そんな感じが今いたしております。以上です。

網島 どうもありがとうございました。ご自身も被災をされ、そして新聞社も大変なときにやはり石巻日日と連携をしながら、地域新聞社として頑張ってくられたこと。そしてそこから見えてきた、これからの宮城の復興と。やはり全県を挙げての復興の重要性、というふうなことをご指摘いただきました。どうもありがとうございました。それではお三方に貴重な話をいただきましたが、ここで若干10分ほど休憩を取りたいと思います。尚、短い時間ではありますけれども、せつかくの貴重な話なので、この点だけはもうちょっと深めてほしいというようなご希望がございましたら、前方に受付が控えておりますので、お申し出いただきたいというふうに思います。それでは10分間休憩いたします。

—休憩—

網島 会場からの発言ありがとうございました。今日の状況を反映して、まことに多面的な発言をいただきました。これらはみな県民センターに課せられた課題だということで、私は県民センターとしてどう考えているかということで後ほど発言させていただきます。会場からの発言に関してパネリストの方にお話しいただこうと思います。はじめにディスティネーションキャンペーンについてのご質問に、今村さんにちょっとお答えいただくことから始めたいと思いますが、その前に会場から手が挙がりました。

会場から男性

はい、無理を言って申し訳ございませんです。今日、気仙沼から20人のメンバーで3時

間以上の時間をかけて、ここまで参りました。それで先ほどいろいろ皆さんからのご意見をお伺いいたしました。その中でDCは見世物じゃないんだから、来るなっていうふうに私は聞きました。ところが私も気仙沼で自宅を流され、自分の店も流され、その他沿岸部の商店の方たちは、自分の店がなくなってしまって、それで復興の仮設住宅で今営業しております。

ところがあの気仙沼の中心部のエースポートがあるところ、観光棧橋の周辺、その方で、そのところで30数軒のお店が仮設住宅で営業いたしております。しかしそこは、平日はほとんどお客さんが集まりません。遠方から観光客の方たち、観光客っていうか、被災地の支援のための買い物のお客様たちが来て、土日は潤っております。それで今回、DCはJR主導のキャンペーンでございます。JRはこの被災地に多くの観光客じゃないですね、その買い物客を呼び込んで、そういう復興商店街の手助けをしようとしております。ですからこれは決して見世物ではございません。

それから私は被災した後に、約2カ月後に仮設住宅に移りました。その中でいろんなボランティアの学生さん、主に東洋大学の学生さんに出会いました。その学生さんたちがいろいろボランティアで復興のための協力をしてくれました。それで私はその方たちに、いろんなことでサポートしました。それで作業の合間に被災現場の魚市場、安波山、船のあるところ、そういうところを車で案内しました。

そうしたら学生さんたちは写真を1枚も撮らないんです。「どうしてあなたたち、写真を撮らないの？」って話を聞いたら、「写真を撮ると、あの学生たちは観光気分で気仙沼に来たんじゃないか、そういうふうに思われるので、みんなで自粛しました」彼らは言いました。ですから私は「いや、そんなことないから、写真をいっぱい撮っていってくれ。その写真をやがてあなたたちは大学祭があるでしょう。そのときに現場の現状を皆さんにこれを伝えてください、そしてあなたたちの口から被災地の現状を話してください」そのように彼らに話しました。そうしたら彼らはおずおずと写真機を取り出して、スマートフォンですかね、それで写真を撮り始めるようになりました。

その後も彼らはずっとここ2年間、学校のほうの方針で気仙沼に、東洋大さんだけではないですけども、多くの大学の方たちが気仙沼の復興のために協力に来ました。やはりその中でいろんな方との出会いがあって、時間があれば観光案内所に行っていて、そういう方たちが来ると、私の車で被災地を実際に案内して、そして写真撮ってください。そしてあなたたちの言葉で、あなたたちの近所の方、身近な方たちに、今のこの気仙沼の現状を話してください。そのように話しました。

そうでないと皆さんは遠くから、遠方から来た人たちは45号線を歩くと、ほとんど車屋さんなんです。ところが車屋さんの援助で、そのショールームとか何かは立派に直っているんです。そうするとその方たちは「もう気仙沼は復興しましたね」そのように言います。「そうじゃないよ。ちょっと裏通りに来てみて」そうするとみんなは呆然とした表情で、言葉が出なくなります。

ですからDCはそういう意味でも、多くのお客さんを気仙沼ならず、被災地に送り込んで、買い物をしていただく。それが今からの復興の大切な1つの要素ではないでしょうか。以上です。

網島 どうもありがとうございました。皆さん方のご熱心な発言で時間が大幅に遅れてしましまして、今裏方のほうから4時10分にシンポを終わる。そしてあなたは5分間でまとめろ。厳命とこう書いてあります。それで方針を変更しまして、これからお三方にこれまでの会場発言を踏まえて、おひとり5分ほどそれぞれ言い足りなかったこと、または言い足したいこと、お話しいただきたいと思います。

今村さんからご覚悟よろしいですか。よろしくお願いします。

今村氏 じゃ皆さんのお話を聞いた中での感想を少し述べたいと思います。まず観光客というのか、被災地を見学、あるいは視察に来たいという人に対する受け止め方っていうのは、例えば気仙沼であれば、丘に上がった共徳丸を残すか残さないかっていうことについても賛否両論があるように、いろんな意見があるなど。ただ、私はできれば、いろんな意見あるけれども、今気仙沼の多分屋台村の方だったでしょうか、大きなだるまがあそこにあります、私はこの間見てまいりましたけれども。お客来ないのに、一生懸命頑張っています。でもそういう中でやっぱり行ってほしいなと思います。

石巻もいろんな被災した商店の人たちが、店を持って集まって商店街つくっていますけど、本当に人などほとんど来ません。そういう中で行ってみたいな。何であんなに商店が並んで、あんなに人が込み合っていた街が、気仙沼も石巻もみんな同じです。なくなったんだろうかなと。これはカメラをどうのこうのってありましたけども、ピースだけはやめてほしいって、それは思っています。ただ、その代わりちゃんと収めて、伝えてほしいなと思います。

それからあとは学校の先生が栗原の話、おっしゃっていました。そちらのほうも取材のエリアでありますので、ちゃんときちっと心に留めて、いろんな形で関心を寄せながら、問題点をアピールできればよいかということ、そこにはきちっと受け止めたいなと思っています。

TPPとかいろんな問題ありますけども、なかなか問いか、いろんな人たちの意見がありますので、私が経験なり意見を言って、うちの会社の幹部も何人かおられますので、余計なこと言ったというのも問題でありますので、その程度に留めたいと思いますけども。とにかく一人でも多く、被災地のことをわかることが震災の記憶の風化を留める1つじゃないのかなと思いますので、そこに心を砕いて報道の任務に当たりたいなと、そのように思っております。以上です。

網島 ありがとうございました。つぎに渡邊さんお願いいたします。

渡邊氏 いろいろ皆さん、会場の皆さん、本当にご意見ありがとうございます。

先ほど気仙沼の方20人ほど、本当に今回参加してくださっているということで、お疲れ様でございます。

今、本当に気仙沼って、いろんな問題が起きています。防潮堤の話も先ほど出ましたが、昨年はずっと防潮堤の勉強会が何回も開かれてきました。間もなくそのリーダー格だった菅原昭彦さんから昨日伺ったんですが、またもう一度防潮堤の勉強会が行われるようです。

やっぱり内湾地区というのは、やっぱり見たい景色だと思うんですね。そういうものが高い塀で囲われてしまうというのは問題だと思いますし、今回結城先生からいろんな生態系のご説明をいただきましたけれども、その防潮堤ができることによって、生態系がどのように変わっていくかというのは、もう本当、100年200年、皆さんが生きていかなければわからないことだと思います。

それで防潮堤についても学者の方たちとか、いろいろな方たちから、シミュレーションで説明をされたりするんですけども。今回、実際に大島という地区で、7軒ほどの家が近くに建っているところで、一番海岸に近いおうちだけが実は残ったんです。ほかのところは全部流されました。

それはその家の前のほうに、小さな何か塔のようなものがあつたので、波がそこをさけて、ほかのところだけを襲ったようなんですね。松島市もたくさん島の島があつたので、東松島のようなひどいことにはならなかったというふうに聞いておりますけれども。波は私たちが想像するような形では動かないということが、今回実際に実証されたと思います。

シミュレーションの中で、このように波が動くだろうとか、このぐらいの高さがあれば、一応チリ地震津波のときのような津波は抑えられるだろうとか、というふうなお話をいただきますけれども、やっぱりなかなか納得はできない。やっぱり納得するためには勉強して、いろんな人たちから聞いて、国や県には地域の声を聞いていただいて、ただ、防潮堤の予算立てがされたのでつくる、というふうなことではなくて、進んでいってほしいなというふうに思います。

また私も昨年、結構友人や知人のおかげで、全国各地でいろんなお話をさせていただきましたけれども、そのときには本当に観光気分とか何かそういうものではありません。とにかく足を運んでくださいというふうにお伝えしました。とにかく見ていただいて、それでお金も落としてくださいと話しました。やっぱり大変な思いをしながら、屋台村にしても、復興市場、そういう商店街ができていますので、やっぱり立ち行くためには皆さんに来ていただいて、買っていただいて、食べていただいて、泊まっていたいただいて、やっぱりそれが多分大切なんだと思います。

そういう中で皆さんに来てくださってということで、かなりの方たちにやっぱりツアーで来ていただいて、私もバスに乗り込んで、こういうふうに変な思いをしながら来て、今はガレキがないんですけども、土台だけ残っているんですけどっていう状況を説明し

てきました。

やっぱりそれを見て多くの方に伝えてほしいと思いますし、また今、南海トラフとか関東大震災とかいろいろ言われていますので、ぜひ自分たちがやっぱりそういう場になったときに、忘れないで高台に逃げるとか、そういうことを逆に学んでいただきたいと思います。そういう思いでやっぱり来てくださってという言葉は、いつも皆さんにお話ししております。会場にいらっしゃる方たちも同じ、被災した方たちは同じ思いだと思いますけれども。その目で被災地をご覧になって、そしてより高いところに、本当にいち早く逃げていただきたいということを、皆さんにお伝えしていただきたいと思います。私も新聞社の一人として、寄り添いながら進んでいきたいと思っています。今日はありがとうございました。

網島 ありがとうございました。最後に結城さんお願いいたします。

結城氏 たくさんのご意見ありがとうございました。とても難しいテーマもいっぱいあって、答えるのにどうかな、中央会の方がおつしやった「TPPが被災地に与える影響は？」ってというのは、多分すぐに答えは僕は言えませんが、思い出したことがいくつかあります。それはお隣の韓国がFTAをアメリカと結んだときに、たまたま1週間、韓国から招待されて、農山村のフィールドワークをしたり、フォーラムをやったりして、現地の方といろいろ話し込みました。

その後、いろいろやり取りが続いていますけども。お米は何とか守れたけど、ほかはゼロになりました。多分それは自動車等ヒュンダイだったり、サムソンあたりを輸出するための、やっぱり農業を全部関税なしに、米以外は、そうすることによって、韓国の農村部の崩壊が始まりました。

そのことによって何が今あるかと言うと、自殺者が2.4倍にふえています。若者が農業できないので、またソウル、都市に出て行きました。残った人たちが自信を失って、それだけではないんでしょうけども。つまりTPPは物と金だけを前提に考えているです。

人間、農村が、漁村は、人々の暮らしの場だということを忘れてほしくないということなんです。そこが弱くなってしまうと、そこが崩壊したり、辛くなっていったりして、人間の生き、暮らす場所として辛いものになっていって、自殺のような方向を選ばざるを得ないみたいに追い込まれていく例が各地にあります。

単にもの目の値段が安いとか、その程度の認識で判断をしてはいけないんだということ。これがだから同じように、震災も金の物差しじゃなくて、やっぱり今日出ました話から言えば、コミュニティとか、いわば近所のありがたさとか、お互いに支え合うとか、そういうことの大切さというのを、やっぱり改めて僕は向かい合わせているなあというふうに思っています。

僕は偉そうに今日ちょっとしやべりましたが、この2年近く、北は八戸から南は南相

馬まで、沿岸部 1,600 キロを 4 回歩きました。改めて意識的に歩いてみました。そこにある集落の大半をずっと 2 年にわたって写真を撮ってきました。その都度、その都度の変化を記録をしてきました。そして勝手ながら、少しずつ変わる、その変わり方をずっと見てきたつもりでいます。理解はまだ十分できていませんが。

そしてこの半年くらい前から、もう二度とこんなところいやだと悲鳴のような声を上げた人たちが、「もう一度頑張ってみたいと思うんだ」というようなことを言い始めたように思うようになったわけであります。

と同時に電話も、かかってくる電話、かけてやったときの対応の電話に変化があります。二度ともういやだという段階から、このごろは「ようやく揺れが収まってきたような気がします」という電話が何通かありました。地震ではありません。心の揺れです。それが収まりつつあるということは、「もう一度」ということを含んでいると思いました。そしてその人たちがこんなことはできまいか、こんなことはお願いできまいかと言うようになった、それを私はサポートしていくっていうふうに思っています。

緊急時における、最初の半年ぐらいは初めての経験でありますから、混乱、判断、ろくな判断できていません。しかしそのころに復興構想会議なんていう、2 カ月で特区を出すような、どういう神経と判断と、現場を見て言ったのか。それが決まったことは決まったで前提にしていくような、そういう硬直したシステムに、私たちのふるさとの未来を託すわけにはいかんと思っています。

そういう意味で人間は考えます。反省もします。そして変化していきます。その変化は悪くなるようにする変化ではなくて、きっと人間の変化はどこかよくなるように、よくしようやっていうよい方向に向かう変化であると、私は甘いですけど思いたいんです。そういう意味で、我が宮城の隣人としての浜辺の人、農業の人、沿岸部のそれぞれのお仕事の人たちの苦しみを少しずつ受け止めながら、あるいはそれが立ち上がっていくのに、1 人の隣人として、このごろは自助共助公助なんて偉そうなことがいわれるんですが、それに対して僕の知り合いのじい様は、「自助公助共助、いやいやそんなことよりもなあ、近所が大事だ」と（拍手）。

はい、我々がこの宮城の近所の人たちに、僕らができること、何だろうか、そういう話し合いの場をたくさん持ちたいものだなと改めて思いました。ありがとうございます。

網島 どうもありがとうございました。若干時間すぎていますけれども、一応出された意見、会場から出された意見について、県民センターとしてちょっとだけ考えておきたいことです。1 つは TPP につきましては、私たちはいわゆる協同組合懇話会というのがございまして、そこでずっとやっていましたが、それに私たちも入れていただいて、そしてもっとしっかりと、TPP についての問題を学習をしていく。学習がやっぱり闘う力になると。そういう意味でその意見を広げていこうということで、今奮闘しているところであります。ご一緒に、農業の方を中心にして、協同組合、市民の方入った学習会をやりたいと

いうふうに思っております。

それからまちづくり、これが一番大事です。6月23日には雄勝町、一番人口が減ってしまった雄勝町で、やはり新しいところの集団移転地が決まりました。その方たちが自分たちの「終の棲家」をつくるのに、自分たちで決めなければいけない、どうやったらできるだろうかということで、そういう相談会が立ち上がりました。私たちもそれに参加をいたします。

そして気仙沼の本吉地区で、ご自分たちが、まちづくりの主体になった小泉地区の方も呼び出してと考えていたら、「俺たちも参加をしますよ」と言っていただきました。そういう形でまちづくりが、自分たちのまちづくりが進んでいくなれば、防潮堤の問題にしましても、何にしましても、やはり多くの市民の声が大きくなっていく。それが防潮堤をも動かすことになるのではないかと、そのように考えております。

そしてまた特に中小企業の問題、特に今回の災害では大手資本がまさに被災地ビジネスを展開をしましたが、その経験を、苦い経験を生かして、地元企業がどうやって伸びていくのかと。復興支援を考えながら発展を進めていきたいと、そのようなことを考えております。そして19日には医療費窓口の、被災者の窓口負担、この減免措置の継続ということで、被災者の皆さんと共に県に挑みます。県がしっかりとそれを受け止めて、被災者のために、いわゆる医療費の窓口負担免除等をもう1年延期できるように、何としても頑張ろうと、そのように思っております。

そういう意味ではいろいろな課題がありますけれども、とにかく一つ一つ考えてやっていきたい、そのように思っております。尚、ここで18年間、ずっと阪神淡路大震災以後、常に被災者のための活動を展開してこられた事務局長をやっていたらっしゃいます、岩田さんがお見えになっておりますので、上がっていただいて、激励のあいさつをちょっとだけいただきたいと思います。

阪神淡路大震災救援復興兵庫県民会議岩田事務局長 ご紹介をいただきました。神戸から来ました阪神淡路大震災救援復興兵庫県民会議の岩田と言います。今日はこのシンポジウムに神戸から、市議員団4名の方も参加をされております。ご紹介をしておきたいと思います。今回のご案内をいただいて、大変嬉しく思ったんですが、すごい取り組みだなというのを改めて感じました。

例えば今度の主催が県民センターであっても、共催がマスコミである三陸新報とか、石巻の日新聞、あるいは大崎タイムスっていう形で共催をされながら、なお後援として、宮城県の農業組合の中央会、あるいはみやぎ生活協同組合、宮城県漁業協同組合、宮城県森林組合連合会、こうした大変幅広い取り組みを進められたという、県民センターに改めて敬意を表したいというふうに思います。

私は復興兵庫県民会議を代表して、今度の東日本大震災でお亡くなりになった方々に、心からの哀悼の意を表し、またあの震災で津波等によって家を奪われ、あるいは働く場

をなくされ、そしてある人は肉親も奪われ、こうした大変厳しい状況の中で今被災された皆さんが再び生業を取り戻す、生活を再建するんだと、頑張っておられる方に心からの敬意を表したいと思います。私たちもともに頑張っていきたい、このように思っております。今日、ご案内いただいたシンポジウム、本当に大変勉強になりました。知らなかったことをたくさん教えていただいて、本当に来てよかったなど改めて感謝を申し上げたいと思います。

今日のお話の中にも少し出たんですが、創造的復興、村井さんはこういうことをおっしゃっている。しかしその標本が兵庫県にあって、兵庫県で成功した創造的復興を、今度は宮城でやるんだというようなこともおっしゃっているようですが、しかしそれは全く間違いであって、創造的復興がどれだけ被災者を苦しめたか。創造的復興によって、鉄とコンクリートのところにどんどんお金をつぎ込んだ。そのために被災者へはほとんど金が回らなかった。阪神では18年前、被災者は、公的支援は一銭も受けることができませんでした。わずかに利子補給があっただけなんですよね。

そして創造的復興でやったあの神戸空港、7年経ってどんどん赤字がふえていく。毎年何十億という赤字をつくっている。また副都心計画として進めた長田区の復興、建物はすごいものが建ったけど、建った途端にシャッター通りになるという、誠に無駄なことをたくさんやった。その代わり、被災者には大変手薄かった。これが創造的復興の1つの現実なんです。

さっき結城先生のお話しなされたあの素晴らしい漁村、あれを潰して特区としてやる。もうとんでもないことだ。これは単に宮城だけの問題ではなくして、広く全国に訴えて、何としてもストップをしていかなきゃならん問題だろうというふうに思っています(拍手)。私たち、日ごろ神戸で住んでいまして、こういう仕事をしていますから、全国の災害の問題というのはかなり関心を持ちながら見せていただいているんですが、ついこの間までの新聞は、この東日本の被災地の報道といえば、どこどこが交流をしたと。どこで歌を歌ったと。そんな報道ばかりであって、そして希望の灯りを点火をしたとか、そういう新聞がずっと出ておって、11日のちょっと前になってから、ぼちぼちこの被災地の状況が報道される。11日になったら、その途端に全部の新聞が同じように何面も使って、パーツと被災地の状況を報道する。テレビも朝から晩まで特集番組をやる。これはこれでいいかもわからん。しかし11日が終わった途端に、ピタッと報道が止まってしまう。これがまさに風化を生み出しているんだろうというふうに思います。

今日、シンポジウムをお聞きしながら、今回ご参加になった地域の新聞社の皆さん、本当に頑張っていらっしゃる。阪神の場合も神戸新聞が、家屋が倒壊をするという中で頑張って、本当に被災者の問題をずっと取り上げて報道をしてくれました。これは本当に大きな力になりました。今日のお話でも、大変な中でも被災地で頑張っていらっしゃる皆さんの生活の再建ができなかったら、地域の新聞社もなかなか復興はしない。そうした関係では、お互いよく協力しながら、ぜひ頑張ってくださいね、本当によりいい関係を築いて

いただきたいというふうに思っています。

阪神淡路大震災から18年。あの神戸の街が、家が倒壊をし、各地で火が出て、大変な大火事になる。絶対に倒れないと言われた高速道路が倒れる。ついこの間だったような感じがするんですが、あれから18年。しかし被災者は今なお、大変な問題を抱えながら、必死に頑張っています。

申し上げたように公的支援がなかったために、借金をして生活を再建しなければならなかった。そのために今もって、借金の返済に四苦八苦をしているというのが現状なんです。災害援護資金を借りたお方350万、返せない。運動によって決められた額ではなくて、被災者の皆さんの生活実態に即した金額で返してくださいというところまで、運動でもって、前進をさせました。従って今、被災者の方々、月々1千円からの返済をやられています。

これがまだまだ、1万人を超える方々がそういう暮らしをやっていらっしやる。私たちは何としても、この問題を1日も早く、返済を免除せよと。こうした要求を抱えて頑張っていきたいというふうに思っています。先ほどお話があったコミュニティの問題、今18年経って、阪神の被災者は新たな困難に直面をしています。多くの被災者は家を奪われたために、災害公営住宅も建てられました。しかし数が圧倒的に足りない、市街地に場所がない。金がない。時間がかかる。ということからUR住宅、あるいは一般の方々がおオーナーになって建てられたマンションを借り受けて、そこを借り上げ公営住宅として被災者に提供されました。

神戸市や県がオーナーと契約を結んだのが20年間で、という期限がある。やがて20年がくるというので、入居されている方すべてに転居をしていただきたい。こうした無茶を言っています。当時でも災害公営住宅というのは、高齢化が進んでいるということで、大変危惧をされたんですが、あれから18年、当時60歳70歳の人が80歳90歳に近づいていく。高齢で体は弱っていく。連れ合いを亡くして、単身高齢者がどんどんふえていく。そうした人たちをものごとく、すべてに新しいところに移ってもらうというような、まさに命を粗末にする、こうしたことを行政は公然とやってきているという、大変厳しい状況です。

しかし私たちは被災者の皆さんと一緒に運動をして、とりあえずそれはストップをして、転居するのは前提では、転居していただくのは前提ではあるけど、障害者とか、病弱者、そういう人たちに一定の基準を設けて残ってもらうというようなところまで、譲歩してきました。しかし残された人は今まで面倒見てくれた人がみんな転居してしまったら、一体誰が面倒見てくれるんだ。終わります。それで移った人も全く新しいところに行ったら、またこれも新たなコミュニティを築くことはできず、孤独死がふえるだけなんです。これが今、阪神の置かれている1つの現状です。私たち18年間闘っています。これから皆さん、長い長い闘いになると思います。どうか体を大事にして、一緒になって、最後まで皆さんと一緒に頑張っていきたい。このことを申し上げましてごあいさつに代えさせていただきます。ともにがんばりましょう。どうも失礼しました。

綱島 どうもありがとうございました。ともに頑張っていきたいと思います。コーディネーターとして、まとめる時間はありませんので、決意だけ述べさせていただきます。一番私の心に残りましたのは震災直後、4月20日に福島県の南相馬市の高校で学年会が開かれたときの、先生の言葉です。こういうことを言っています。「君たちは希望である。茶髪でもいい。赤点を取っても構わない。とにかく君たちは希望なんだ。我々はその君たちの希望、それを育てる。世界の宝として育てる、そういうことを我々は考えなければならないんだ。とにかく君たちを何としても宝にする。我々も頑張る。容赦はしない。それが我々の生き様だ」そう書かれていました。私たち県民センターも同じ気持ちです。この被災からの復興には長い時間がかかる。長く続くというふうに言われました。確かにそのとおりでと思います。しかし、次につづく世代が、希望が持てるような土台だけは何としても私たちがつくっていかなければいけないというふうに思っております。そしてその基本は今日、結城さんが言われました。まさに人、暮らし、そしてコミュニティ、そして生業、こういうものを軸とした復旧が何よりも先決だろうというふうに思っております。万難を排して、暮らしを守り、浜の暮らし、農村の暮らし、そしてまちの暮らし、ご近所の暮らし、これをしっかりと守っていく、そういう活動をやっていきたいと。

そして阪神淡路の方たちと力を合わせて、新しい、夢の持てるようなそういう、新しい災害救助法をつくっていくような、そういうような研究もやっていきたい。そのように欲張っております。どうかこの欲張りを何とか実現できるように、皆さん方のご支援もお願いしたいと思います。本日はどうもありがとうございました。なお、結城さん、そして地域新聞の3社、皆さん方に感謝を申し上げまして、シンポジウムを終わります。どうもありがとうございました。

司会 パネラーの方々に大きな拍手をお願いいたします。阪神・淡路の方にも一緒に運動を広げていきたいという拍手をお願いいたします。ありがとうございました。これでシンポジウムを終わりにしたいと思います。それでは本日のシンポジウム閉会に当たりまして、主催者の東日本大震災復旧・復興支援みやぎ県民センター事務局次長村口至さんよりごあいさつと訴えがあります。どうぞよろしく申し上げます。

村口事務局次長 皆さんお疲れ様でした。本日は800人余りの方々がご参集いただきました。ありがとうございました。また、神戸の市会議団の4名の方をご紹介させていただきます。森本真さん、山本じゅんじさん、味口としゆきさん、加味美昭さんです。ありがとうございました。

震災復興3年目に入ります。いよいよ私たちがどういうまちづくりをするか、どういう復興をするかが問われます。本日のシンポジウムではもう一度ここで生きたい。もう一度ここに生きるんだという、この思いが漁師の方々が語られたとおり、この思いをどれだけ

県民全体のものにするかが、私たちに問われている課題ではないかと思います。なお、私たちのセンターは当初から T P P にどう闘うか。

もう 1 つ、大きく復興を阻害するものとして、女川原発の再稼働を阻止しようということがありました。皆さんの袋の中に原発の署名用紙が入っております。30 万の署名を目標としておりますが、現在 8 万に達したところであります。30 万を県知事に押し付けようではありませんか。そして女川原発を廃止させましょう。

もう 1 つ、緊急のお願いは来週 19 日、医療費の減免をストップさせない。このために県議会の最終日に、知事に向かって声を上げるために、19 日の 11 時に県庁にお集まりください。そして知事をつかまえて、最後に知事に継続させるということを約束させる運動をしたいと思います。まさに県民が動かなければ、決して県政は私たちに耳を向けてくれないということも、この間明らかになりました。皆さん、お体を大切にしながら、精一杯これからも頑張りたいと思います。本日はありがとうございました。

以上